寛政重修諸家譜

第二冊

828
339
1

宮内庁書陵部

卷第六百八十三
兼通流
本多
卷第六百八十四
兼通流
本多
卷第六百八十五
兼通流
本多
卷第六百八十六
兼通流
本多
卷第六百八十七
兼通流
本多
卷第六百八十八
兼通流
本多
卷第六百八十九
兼通流
本多
卷第六百九十
兼通流
本多

寛政重修諸家譜

第百六十一冊

828
339
1

百六十一

寛政重修諸家譜卷第六百八十

藤原氏摠括

鎌足

或鎌子　内大臣　大織冠

天児屋根尊の神孫法食子卿の子にして

はしめ中臣連たり天智天皇八年十月十

五日姓を賜はりて藤原氏とふる

不比等

右大臣　従二位

天武天皇白鳳十三年朝臣の姓をたまふ

大れより通して右京朔左といふ

武智麻呂

左大臣　正一位

南家のはしめふりその第南方にありしへより世人南家と称す

房前

参議　従三位

北家のはしめふり其第北にあるしへより北家と称す

宇合

式部卿

参議　式部卿

正三位

式家のはしめふり式部卿に任するしへ式家と称す

麻呂

参議　兵部卿　左右京大夫

従三位

京家のはしめふり左右京大夫を兼るしへ京家と称す

真楯　大納言　正三位

魚名　左大臣　正二位　鶴川邊

鷲取　中務少輔　従五位上

藤成　伊勢守　従四位下

藤嗣　参議　右兵衛督　従四位上

高房　越前守　中宮亮　正四位下

山蔭　中納言　民部卿　従三位

時長　常陸介　民部卿　鎮守府將軍　正五位下

内麻呂（うちまろ）　右大臣　従二位　歸後長岡

真夏（まふつ）　参議

冬嗣（ふゆつく）　左大臣　正二位　歸閑院

長良（ふくら）　左衛門督　中納言　従二位

歸批把

良房（よしふさ）　摂政　太政大臣　従一位
歸白河

良方（よしかた）　大蔵大輔　従五位上

良門（よしかど）　内舎人　正六位上

基経
摂政
従一位
関白
太政大臣
歸堀川

忠平
摂政
従一位
関白
太政大臣
歸小一條又五條

師輔
右大臣
正二位
歸九條

師尹
左大臣
従一位
歸小一條

兼通
関白
歸堀川
太政大臣
従一位

兼家
摂政
従一位
関白
太政大臣
歸東三條

公季
太政大臣
従一位
歸閑院

藤原氏諸流略図

兼通流

兼通（かねみち）

関白　太政大臣

顯光（あきみつ）

左大臣　従一位　本多の祖

歸廣情

寛政重修諸家譜

第百六十二冊

828
339
1

五十二

寛政重修諸家譜卷第六百八十七

藤原氏

兼通流

本多

今代足譜を按するに本多隠岐守康完の祖隼人正時の二男作左衛門信忠初名次郎九郎左衛門と稱す播磨守と稱すよりわかれ出でゝ信忠三河國額田郡欠村に住し信忠君清康君に歴仕すその男を次郎左衛門大夫重正といふ重次をよび九郎重吉等の父なり寛永系図重次重吉よりをもて系をたてすといへども今その家譜により是す

るとまろの系図ともよく符合せるよ
つて重正より系をおこす

重正

或重信　次郎九郎
作左衛門
三河國額田郡大平村に住し清康君廣忠
卿に歴仕し元亀三年三月十一日死す法
名了頑三河國の大樹寺に葬る

重基　次郎九郎
孫左衛門

重富

重名於沙弥

岡崎三郎信康君に仕へ武功あるれども
外重次郎許に閑居し後男富正に家督
越前國府中に住す慶長十七年四月六日
死す年九十四

富正

源二郎　志摩　伊賀守
丹波守　従五位下　後歸元覺
天正十二年
東照宮のおかせにより中納言秀康卿
に附属せらる時に五家老となり秀
康卿越前國に封せらるゝ比とき富正

ハ三万九千石を領し府中城を使す慶
長十六年三月二十日従五位下を叙し
めち松平伊豫守忠昌をつかへ四万五
千弐百石餘を領すさきより代々かれ
家の家老なり

重次（シゲツグ）

八郎　作十郎　作左衛門
後弾正高久
母ハ某氏
天文二年より清康君を仕へ奉てもつる
時なり　七歳　めち廣忠卿

東照宮を歴仕し永禄元年二月三河の國寺
部の城主鈴木日向守重教吉良義昭と打
通して織田家を頼すさきより
東照宮御出馬ありて寺部の城をせめ
ふさぐとき重次父重政とともに先発
し敵二人を討て身も創をかうむる六年
一向門徒一揆起るとき重次を宗旨なりと
いへども主君をあらためず誓書をあてま
つりいそうの一揆等ハ在所なれば入
火をはかりて徒あまたうち殺めち所
ゝあて軍忠を励す
東照宮主君を御感ありて三河國ふかい

まをいて采地をあまふあるとき御麾下の士織田右府に家臣と爭論せしとありて我に理非決しらあり右府令を出しあ家より各士一人を出して鉄火をとらしめそれに理非を決すへしとありおいまをいて重次をめさき衆まに代て右府の令まを忘あらふへきむ仰をうけあまいり御手つらかち栗をあまふ重次則伊賀八幡宮に祈願まをいて鉄火をとる手いきいらも疵つらすあへまを御麾下に士理まを決せりおきまよりふらく御感を蒙る七年三月東三河に牛久保まを御発向あ

りて七崎城をせめ落しあまふおれとき仰ふより重次内義三左衛門信成といまをおきをまもる六月令川氏真一万俵に兵をひきおて一宮城をせめかおむまより

東照宮三河に兵を出しておきをあすけあまふおらまをいて令川勢国を解て牛久保の陣営まを引退くおのとき重次及い石川家成天野康景大久保忠世等を御前まめきき令日に我あくらい小勢をもつて大軍を追撃し氏真ら目前おて敵の強矢あまあうち所しおと汝等ら粉骨を尽し

とあらきしらおとして御家色斜ちら
す八年三月七日重次高力左近清長天堂
三郎兵衛康景とともに本多作藏とふり制
法をさだめ法を沙汰す重次性剛邁にして
怒おのしとき此人おきを称して鬼作
左といふ十二年三月五日遠江国掛川城
城をせめ多おふのとき重次内藤三左衛
門信成濱辺を警守堀秋平兵衛忠政
とともに世むらしいしらは五月六日戊
真つおよ和をおして敵を退くおきよよ
り酒井忠次石川数正とおちしくを城を
ちる元亀三年十二月二十二日三方原合

戦のとき左あらひあてきつり退陣まを
よして後殿すときに策多く馬を対らき
歩立まちして追来る敵十騎ちらりとい
とこあくうひ米月のたてものに駆此馬
に策たる士を突倒しを首をとりを除の
敵を追散しかし此馬まうち策て濱松の城
に入
東照宮ふうくを働を称しあおふときに
作ありしい信玄あとへ城をかおむと
も士卒を乏しからすちうきとも兵粮此に
といらいおやと御尋ありしまより重次
あらうしめ籠城の備をまうけ国中に合

して三九郎に兵粮おのく積貯へきよし言
上せしかはたちまち感ありて出きよ
り重次をして三北田輪郎をかせあまふ
天正元年諸将とおのく武田勢に籠れ
る長篠城を攻落すときに武田遠江国
をひきおて遠江国森郷に出張す重次
作まより地向て軍功をあらはす二年二
月秀康卿生きさせ給ふとき御台所を
うけあまりり重次が宅にをいて養育し
奉てあつる三年五月二十五日長篠合戦
のとき重次敵七八騎に中に地入組うち
して首をはねあり生係に敵重次をうゑむ

とす重次おたゝかつて創をかうむる
と七箇所まで右に眼を害ふいろときに
郎従皆ゑすけきあり敵二騎を討とる
きよりて孫兵衛とく敗走すに年五
月十五日重次が宅に濱弟ありて志津の
弟刀を奪ふとき三騎士百人を附属せ
らる九年遠江国高天神の城攻に重次一
方に寄手とあり首十八級虜十人をはた
り十年駿河国を作したまふに又重次
作まより江尻久能の城を守りて国中
の政務を司るに又小條郡の兵伊豆
国戸倉城より出て駿河国沼津城を襲ふ

重次沼津城より兵を発して出羽を追う
ち首三十五級を討とる出羽ときい
東照宮甲斐国に帰進発あるまより重次
かれ地れ出とゝも告あてまつるれ右八
月十四日阿部善九郎正勝平多弥八郎正
信大久保新十郎忠隣連名れ手先をもて
を功賞しあまひ重次在とゝ放火し出
とゝ足場を破りをの高名有れ吉き出
しめきゝふを諸勢を指南すへきれより
台命あるまゝ甲斐国葛西あて討とる首
敵陣れ前ゝ集せらるゝれとゝ出ていよ
〳〵正神ふけきは遠らすして敗軍たるへ

し三枚橋豊国寺等いの龍脇油断あるへ
からさるれむ手仰下きる十二年長久手
合戦のとき鈞命をうけて尾張国星崎城
を守る六月蟹江城をせむるれ時先鋒と
ありて後豊臣太閤と和睦あり秀康卿を
よひ石川数正ゝ男勝千代重次ゝ男成重
をも質として京都ゝもらしめあまふ十
三年和睦まゝ遣表ありて石川数正すて
ゝ岡崎を退去し大坂ゝ至りて太閤ゝ孫
す重次謀をめくらし質子成重を三河ゝ
かへらしむ
東照宮ゝ恩を感しきせあまふ時ゝ太閤

三河のなせめきあるへきよ風説有けき
ハ法老臣をめして宮崎城を守るへきも
ゝを貪婪せらる本多正信言上しけるハ
節を死するの臣まあらきをハたゝへ
らすゝ
東照宮たゝらハ重次をあらすしてたゝ
ゝ有へきとて重次をめして命せらるま
ゝ二百騎の士を附屬せらるゝ城は御
家御代ゝ基を開きゝ所ゝ地なりしを
あつけゝ給ふ之と弓箭の面目なきを
すきしと言上しけれハたゝハ多御吉を
かたゝ十二月八日未地及ひさきを頒ら
るゝもゝとゝもまて永く家を傳へ無畏た
く厚立忠勤を抽すへきもの御感状を賜
まし且重次すてゝ老臣を及ひ給ハ後
世に為ハ為ませよとおゝせありて男成重ゝ
名を者して給ふ十二年ふ給ハひ太
閤と和睦とゝのひて
東照宮御上洛あるゝ太閤ハ母儀大政所
人質として岡崎ゝ下向せらるゝとき
井伊直政及ひ重次をして出迎を守護せ
しめたまふ大政所洛ハ太閤ゝ語
らきしハ岡崎ゝて井伊直政を多重次た
るもの我所所を守りしゝ側ゝ勤をつ

置て若京邸は変事あらむまゝすみやか
に焼殺さんとせ一恐ろしき今を忘れず
らすと有しかは太閤も是忠義を感せら
るゝといへとも如きより太閤のむすめを
遣ふ十八年小田原征伐のゝち太閤
東照宮を召ていとく重次をして我をあ
さむきて人質を呼還しまゝ如此役まを
いても是傍なて見参すへしとて加藤遠
江守光泰をもつて招くといへとも来ら
すはゝ我はかりよからさるそはかりか
のゝち再礼に若い家臣に列とす多ま
ふはとふらきとふり出きまより重次ハ
上総国古井戸(ふるゐと)に居住せしめられ三千石
に采地をたまはり諸役をゆるさるゝ此ち
下総国お馬(さうま)郡井野に采地をうつされ慶
長元年七月十六日井野にをいて死す年
六十八法名高分(今の是清浄運)寺地青柳の本覚寺
に葬る

妻ハ島左伊賀守忠吉ノ女

重定(けさだ)

嶋十郎　久次郎　友平

永禄十一年十一月ノ日死す法名浄安

妻ハ大久保五郎右衛門忠俊ノ女

重吉　本多金三助忠茂ノ祖

九郎

女子

母ハ某氏

平岩助六郎康長ノ妻

女子

母ハ某氏

本多九郎秀吉ノ妻

女子

母ハ某氏

加藤孫左衛門政ノ妻

成重

仙千代　母下　次郎太夫

飛騨守　従五位下　政仕帥土菴

母ハ忠吉ノ女

元亀三年濱松ニ生ル　天正四年五月十一日

東照宮重次ノ邸ニ渡御ありしときも

めてまみえ奉てあつ時ハ五歳ニ成ル　秋廣

より御所柿を多おふ十一年より御傍まつ
りへあてまつり十二月豊臣太閤
と御和睦ありとき秀康卿まゐらひ人質
とまりて京師まおもむき十三年父りゑ
ちらひまりて濱松まかへり十二月八
日御前まをいて元服しおわせまりて
丹下まあらあも十八年小田原陣のとき
父まに代りて御旗下の後侍とあり落城の
ときおわせまりて城中まいあり督姫
君をむかへて御陣営まかへるより父重
次太閤よりもの遣ひ来田まを尾張せしめ
らるゝ以ときに成重もとまを地まを領す

をもち父りゑ遺跡をあまひ慶長五年関原
に役まをありひあてまつり七年十月二
日御馬尾を多まひ近江国蒲生郡まをい
て二千石を加へらる十八年松平三河守
忠直りゑ家臣等爭論ありとあるまより五
月十九日作をうけあをりて忠直まを附
属せらるを封国越前まおもむき制法を
沙汰すとき四万石をあまひ九月城
まを領す十九年大坂御陣のとき忠直まを
して先鋒まを引しに十二月に天王寺口を
せむ成重馬を施せ隍底に柵をやぶりす
てまを堀下まいあるとき矢石きありて

成重ら兜の左と鎧北胴の端まあ多り男
重能もま多指物をうち打る至徐郎従等
うち死するもの十六箇創をうふるも
の百六十八箇竿十八本まておれらるし
といへとも成重ふを奮い戦てやますと
きゑ小栗又市忠政来りて味方をいらく
引退くへきよし令をつ多ふるまより堀
際より十歩ばかり引ちり抜き備を立ち
を火炮をもふちて城をせむときゑ
東照宮成重をめさるるよし御使あ度
まをよしいらい茶磨山の御陣営まい多
るとおわ汝等急ますいそて城をせむ

るといへとも引退くおとともまあすこや
らうおき人の恥るとおわまあらすや
と仰ありしらい成重おあ多へあてまつり
しい軍令を告来るまよりて退けりおき
我恥辱まあらす法勢をのく本陣まらへ
るといへとも吾勢ひとり城辺をさらす
ゑきくい軍監をつらいさきおきをたつ
自問いせ多まふへしといふ
東照宮きおしめさき御乾色斜ちらすを
和城中より忍の者陣場まきあ多る成重お
きを生捕て本多正純ら許まを送る五ら正
純より使してきれふ矢石まを觸らとおわ

此甲冑を見すへしといひをくりしより成重その矢をぬきすして男重能を使者にそへて送りしかは正純則重能を御陣営にともなひ参りしかは御小袖羽織等をあたへ給ふ成重を御前にめされ是より此ちはせ城をあけ給ふのときかたらす汝をもつて先鋒とおすへきよしたのませをかうむりときに安房守力重次御前にありて成重すてにきはふのたいらひに城の形勢よく知るへし他の先登なるへしと言上す元和元年此役に天王寺表にもせむらひ五月七日の合戦に諸軍に先為ち力戦し馬上にをいて敵二騎をうちとりまた高田幸村の勢を追散し首二百七十三級をはなり已に大手つのたに辺を破りて一番に城に策入成重ら鎧たのわたらに鉄炮あるといへともつとめたらひて首二十八をはつるに城つに攻入おいしに火を放つときに郎従うち死するもの五人創をかうむるもの七人ありさきより御本陣にいたりて御感を蒙る

東照宮二條城に渡御のときはしに御前に

あさきさき先登せし時敵は強弱を問
せずまし槍を合せしやを石と御尋あり成
重おのへ〳〵てまつりて敵弱弱まりても
やく引退くもへる鎗を合するを及ハすす
と言上すまゑ汝ら馬逸拍まりてたゝ一
騎先駆せしよりゆゝしきるれもれ
ハせあり閏六月十九日従五位下飛騨守
に叙任すときに御手つから國光の御刀
をよび三吉野と號け一巻壺をゑまふま
ゑ
石徳院殿はもめさきて大坂戦場のおと
ともゑつゆきせゑゆふをもちて徳國の

舊知三千石を三男毋下重良にあゑへら
るもち忠重ら所領没収せらるゝ
寛永元年五月十八日めし返さる
大猷院殿に仕へゑてまつり六千三百石
を加へらきすへて四万六千三百石を領
しおを九国地に住すおきよりもち代
帝鑑間に侍す三年九月洛に上らせゑ
ふるよりおゆゝしゑゑてまつり御帯内の
とき諸馬おて供をすおのとき領地の内
三千石を二男志摩重春にわらちあゑふ
十一年御上洛のときも扈從し正保元年
九月二十二日国本内義助義政潔ありて

免しあつけらる二年五月十九る陸仕し
に年六月二十三る九国まをいて卒す年
七十六鉄哉土菴本光院と辞す越前国坂
井郡の本光院まを葬るまを男重能ら同墓
する也ふ所なり

室ハ土岐山城守定政ら女

女子

母ハ某氏

内蔵小一郎某ら妻

重能（しけよし）

助五郎　作左衛門　信濃
治部　治部守　従五位下

母ハ定政ら女

天正十八年生る慶長十一年をもつて
東照宮まをみえ給てあつり作まをりて
台徳院殿まを仕へ給てまつる十九年大坂
此役まを父とおなじく天王寺口まをたもむ
き十二月に城此堀ほまをすこと指地を
も矢石の為まをおおらるといへともも
を勉たゝふ五る父ら使そして浦本陣
まい給る此時御前まをめさるてものを多

まふ元和元年まゐ大坂の礼おはるとき
東照宮に仰により父に代りて九園の堵
を守る寛永十八年十二月晦日従五位下
治部少輔に叙任し正保二年五月十九日封
を襲ぐ年二月二十六日をもつて領知朱
印くのいとまを賜ひ慶安元年七月二十
七日父に遺跡安吉の刀を献し
厳有院殿より西蓮の服装をあてまつる四
年十二月七日九園はをいて卒す年六十
二大巌在心常光院と謚す葬地成重まお
ふ

室は大久保加賀守忠常の女

重看（しげつぐ）　本多兵庫成孝の祖
志摩　大膳
母は上野おおふ

重良　本多丹下繁父の祖
孫四郎　丹下
母は上野おおい

重方（しげかた）
主税　民部

母ハ某氏
松平伊豆守忠昌ヨツリ

女子
母ハ重能ヨリ
松平但馬守直良ノ室

女子
母ハ上ヨリ

女子
母ハ某氏

岩城伊豫守重隆ノ室

重昭（しげあき）
大吉　作左衛門　飛彈守
従五位下
母ハ忠常ノ女
寛永十一年生ル正保元年十一月十日ハ
ヒメテ
大猷院殿ヨリ拝謁ス時ニ義慶元年二月八
日遺領ヲ継　十三ニ父ノ遺物兼光ノ刀ヲ
献ス十二月二十八日従五位下飛彈守ニ
叙任ス寛文二年二月五ニ領知ノ御朱印

をかきる是さきる
大猷院殿より御朱印を給ふとゝいへと
も領知をわかち高の負数を遺せりまよ
りてあり延宝二年二月十二日卒す年四
十三智光真海重昭院と號す葬地成重と
おなし
室ハ松平伊豫守忠昌ノ女後離婚す
継室ハ甘露寺宰相副長ノ女

重益

初成宗　成知　成伸

成秦　作左衛門　飛騨守
従五位下　従仕歴宜休
母ハ副長ノ女
寛文三年生る十一年十一月五日はじめて
厳有院殿まみえたてまつる時に九歳延宝
二年三月十九日遺領を継二十三日襲封
を謝する比ときに家臣二人沛前に いつる
ところ此日父ノ遺物志津兼氏の刀を献し五
年閏十二月二十六日従五位下飛騨守に
叙任す元禄八年三月二十二日重益常ヌ
改事よろしからすとゝのゝしきを家臣

罪科ありとて手食を絶せしむとあと非
道なる挙動ありとて所領を没収せらる
松平寺政宮仲澄なめしあつけらるる宝永
六年八月二十日なるとる七年閏八月二
十八日
文昭院殿より拝領し九月十六日伯耆国
郡ふうちまをいて采地二千石をあた
りし寄合に列し享保十三年十月九日致
仕す十八年二月二十五日死す年七十一
法名寂照小石川の専量院に葬る代々
菩提寺とす

妻は松平刑部大輔頼元の女

女子
母は某氏
五島佐渡守盛暢の室

重信
外記
母は某氏
兄重益の養子

女子

母ハ某氏
甘露寺安九郎を婿を約し離縁ありて雑波
三位宗尚卿嫁す

重信
外記
実ハ重昭の二男
元禄二年二月晦日重益の嗣となり八月
二十六日卒す

重修
或重條　太郎八　後兵衛

重計
実ハ本多作右衛門玄洛の三男母ハ某氏
元禄四年七月二十五日重益の養子となる
り八月十五日をもつて
常憲院殿にまみえ奉てまつる八年三月
二十二日父の跡を継して京極喜内高通
をめしあつけらるる宝永六年八月二十日
ゆるされぬちやまひにより兄本多五
郎左衛門玄忠の許にかへる

重貞
小四郎　作左衛門

実ハ服部清右衛門安照ノ五男母ハ三浦氏
重益ノ養子トナル
正徳二年七月晦ノ日ヲモツテ
文昭院殿ヨリ拝領ス享保二年二月十二日ニ
父ヨリ先ダチテ死ス年十九

成興

初重勝　大膳　作左衛門
実ハ五島佐渡守成暢ノ二男母ハ宮崎氏
重益ノ養子トナル
享保五年三月十五ノ日ヲモツテ
有徳院殿ヨリ拝領ス十三年十
月九ノ家ヲ継ギ合ヒトナリ十七年十一月
二十六ノ日政仕ス宝暦三年六月二十四ノ日
死ス年六十三法名了直

成明

初成義　仙千代　靱負
母ハ某氏
享保十七年十一月二十六ノ家ヲ継ギ合
ヒトナリ十二月六ノ日ヲモツテ
有徳院殿ヨリ拝領ス十九年二月六ノ日死ス
年二十一法名故融

女子
梶川與惣兵衛上秀ノ妻

女子
宮垣齋宮某ノ嫁ニ離婚シテ篠山吉之助光貞ノ妻トナル

成邑
作左衛門
兄成明ノ養子

女子

成連
鉄次郎
成邑ノ家ヲ相續ス

成福
亀蔵
本多宮成均ノ養子

女子
大井七郎兵衛一裝ノ妻

成邑

大吉郎　作左衛門

実ハ成興ノ二男母ハ某氏成明ノ嗣トなる

享保十九年五月三ノ遺跡を継家の合となる寛延二年八月二十八日をもつて惣信院殿ままみえあてをつる宝暦五年十二月二ノ日きき居宅焼亡せ〜ゑ仮ま布田清兵衛正章ノ宅地ま住〜ゑめち十年係ま〜をよしあを彼ノ許ま寓居〜ふからゑ出と告あてまつらさり〜越後ま より出仕をとゝめらゑ六年二月六ノ日ゑさる天明六年十一月十七ノ死す年六十九法名享楽

妻ハ大井七郎兵衛昌全ノ女

成連（なりつら）

鉄次郎

実ハ成興ノ三男母ハ某氏

天明六年十二月六ノ成邑ノ遺跡を相續

一小普請となる寛政三年四月二十六ノ

改仕す（あらたまる）

女子

成連の養女

重賀

初成憲　冨松　左源太

作左衛門

実は安房大和守惟徳の二男母は某氏成連の養子となりてその女を妻とす

寛政三年二月二十六日家を継ぐ十八家禄拾二千石

十月六日もしくは

将軍家お拝謁し五年九月十八日御小性組の番士を列す

妻は成連の養女

女子

実は成邑の女成連は養母にして重賀の妻となる

重矢

八義

母は成連の養女

女子

女子

女子

家攷　九ヶ立葵　九ヶ本乃字